

### 3 当院における肺塞栓症の現状と対応について

大橋さとみ・肥田 誠治・本多 忠幸  
遠藤 裕・山本 智\*・小村 昇\*  
風間順一郎\*

新潟大学医歯学総合研究科救命救急医学  
分野  
新潟大学医学部附属病院集中治療部\*

過去2年間の当院入院患者の肺塞栓症発症状況を検討した。症状と血液ガス所見のみの疑い例10例、画像で確定例6例、画像検査後も非確定6例であった。確定例は術後安静解除時3例、カテーテル血栓関連1例、偶発の発見2例で、全例危険因子を認めた。予防処置は術中弾性ストッキングの1例で、抗凝固や血栓溶解治療の開始時期は発症1時間以内が1例、他の5例は画像診断後で数時間から数日後であった。経過は改善3例、進行3例、うち1例はウロキナーゼ投与後肺出血で死亡。疑い例は、半数で弾性ストッキングやヘパリン投与で予防がなされており、症状出現時には画像診断前にヘパリンを開始されている例が多く、症状は全例で改善していた。最近当院で導入された、入院患者に対する肺血栓塞栓症予防ガイドラインでは、早期診断に努め、疑った時点でヘパリンを開始するとしており、対応の標準化、治療の遅れの回避に役立つと期待される。

### 4 特発性血気胸の緊急手術3例

上野 光夫・諸 久永・田山 雅雄\*  
済生会新潟第二病院心臓血管・呼吸器外科  
同 救急科\*

2001年から2003年までの3年間に3例の特発性血気胸の緊急手術症例を経験した。39y.o.M 29y.o.M 44y.o.Fであり、いずれも自然気胸の既往歴はなかった。主訴は胸痛、呼吸困難であった。入院時Hb 12.0-14.4g/dlで貧血所見を認めず、いずれも搬送入院時にはショック状態ではなかった。術前出血量は1050, 670, 210mlで緊急手術を施行した。胸腔内貯留血腫+血液は845, 3500, 1377gであった。出血源は、肺嚢胞と胸壁の間に形成されていた冊状物内の細動静脈が気胸発症時

に断裂し、その自由断端からであった。手術内容は出血点の止血、肺嚢胞切除術であり、手術死亡、手術合併症はなく、入院期間は7-10日であった。

【結語】特発性血気胸の手術適応は、入院時の血液検査所見、循環動態に依存せず、胸部単純レ線像、胸腔穿刺の結果から診断確定後、直ちに緊急手術の決断をすべきであり、胸腔ドレーン排液量を判断基準とすべきではない。

### 5 当院における農薬中毒患者の現状

三上 理・内藤万砂文  
長岡赤十字病院救命救急センター

平成11年より平成15年1月までに当センターに搬送され入院加療された、農薬中毒患者の現状を報告する。男性13人、女性3人、計16名が入院し、平均年齢58.1才(2才から85才)であった。服用された農薬は有機リン系7例、グリホサート3例、パラコート3例、グルホシネート1例、その他2例であった。死亡例は5例で、有機リン系2例、パラコート2例、グルホシネート1例であった。人工呼吸器管理を要した症例は計5例で、うち3例は有機リン系で、有機リン系2例、グルホシネート1例の計3例が死亡した。パラコート中毒では3例全例で血液吸着が行われ、うち2例が死亡した。基礎疾患を有した症例のうち4例は精神神経症を有し、胃癌、HIVキャリア各1例であった。誤飲の2例を除き、すべてが自殺企図であった。それぞれの服用量は様々であり、有機リン、パラコート中毒者とも適切な治療により軽快しているが、服用薬に一定の傾向はなく、遅発性の農薬でも死亡していることから、農薬中毒患者の搬送の際には、服用薬、服用量、同時服用物の存在などを早く知ることが大切である。